

発行：オープンアクセスリポジトリ推進協会
jpcoar@nii.ac.jp

《 IN THIS ISSUE 》

(特集) オープンサイエンスの潮流を追う！ 世界各国のイベントレポート
 (連載) オープンアクセス論文紀行
 (新！連載) 参考にしたい！！ グッドプラクティス

JPCOAR 新会長よりご挨拶

立教大学 図書館長 中村 百合子

21世紀のよりよい社会のあり方を考えるとき、オープンアクセスは鍵概念の一つだと信じています。思いがけないところからの破壊的なイノベーションへの期待もありますが、同時に、人びとが自由に情報を入手し、自らの生き方を選択し、よりよい社会を作る動きを起こしていくという、私には理想的に思われる社会のあり方にも、あらゆる情報のオープン化を進めることが、大きく貢献するのだろうと思っています。

オープンアクセスの重要性は、世界的に国レベルでも認識されており、図書館関係者の間では確実に取組が活性化していま

すが、一方でそうした言葉を聞いたことがない、聞いたことはあるが具体的なイメージがわからないという方はまだ多いのかもしれないと感じています。JPCOARが進めるような動きについての学内の認知を広めるという意味でも、また、図書館で働く私たち自身がその最新動向を勉強する機会としても、今年、立教大学図書館が会長校を務めさせていただくことは、大変、貴重な機会をいただいていると感じております。オープンアクセス活性化に向けて、本協会を通してみなさんとの連携を強化してゆきたいと考えています。

2019年度 新体制のご紹介

JPCOARでは、2019年から2021年度の3年間の中期的な戦略として、『[JPCOARオープンアクセスリポジトリ戦略2019～2021年度](#)』を策定しました。このビジョンと戦略を実現するために、今年度より体制を改め、4つの作業部会と運営委員会が主体となって具体的な活動に取り組みます。

■ 研究データ作業部会 ■

オープンサイエンスの推進に寄与するため、研究データの公開、流通、評価に関する先導的な取り組みを行う。

■ コンテンツ流通促進作業部会 ■

オープンアクセスを推進する学術情報流通の基盤を整備し、コンテンツの流通、活用を促進する。

■ コミュニティ強化・支援作業部会 ■

オープンアクセスリポジトリを支えるコミュニティとしての機能を強化する。

■ 人材育成作業部会 ■

オープンアクセス、オープンサイエンスの推進に対応できる人材育成を支援する。

■ 運営委員会 ■

協会の活動基盤を強化し、JPCOARのブランド力を高める。

特集：オープンサイエンスの潮流を追う！

もうじき2019年も3/4が経過、年度で見ても折り返し近く。この上半期にも、国内では、Japan Open Access Summit 2019やNIIオープンフォーラム 2019、海外ではCOAR Annual Meeting 2019やOpen Repositories 2019などなど、オープンアクセスやオープンサイエンスをテーマにしたイベントが多数開催されました。この間、日本では平成から令和へという時代のうねりを経験しましたが、なおも大きな課題としてあり続けるオープンサイエンスは今、どのようなうねりを見せているのでしょうか？ 今回の特集では、最新のイベントからオープンサイエンスの潮流を読み解くべく、2019年上半期のイベントからJPCOAR作業部会員が参加したセッションを中心に参加レポートをお届けします。



報告

駆け込み！ DSpace等からJAIRO Cloud（現WEKO）への移行相談会

2019年5月30日に一橋大学一橋講堂で開催された国立情報学研究所学術情報基盤オープンフォーラム2019の一環として「駆け込み！ DSpace等からJAIRO Cloud（現WEKO）への移行相談会」を開催しました。JAIRO Cloudへの移行（検討）中機関の担当者を対象に、作業概要の理解、課題の共有と解決を図ることを目的とした相談会で、参加者は10機関12名でした。

まず前半に、前田朗氏（東京大学）より「[JAIRO Cloud移行相談会における基本事項](#)」の説明、続いて筆者より[DSpaceからJAIRO Cloudへの移行について事例報告](#)がありました。その後の質疑応答では、「移行作業をどの業者さんに依頼したのか?」、「エラーが出たときはどう対処するのか?」などの質問がありました。

次に後半では、2班に分かれて個別相談を行いました。「移行のタイミングでJPCOARスキーマ対応をした方が良いか?」、「データクリーニングはどうすれば良いか?」、「書誌だけの登

録も可能か?」などの質疑応答があり、班員で解決方法を共有し、終了となりました。

さて、ノウハウと経験の蓄積がある現JAIRO Cloudへの移行相談会は今回が最後になります。現JAIRO Cloud以外から新JAIRO Cloudへの移行ツールの提供は2020年度以降の予定です。新JAIRO Cloudへの移行を検討する機関は、ものすごく心細いとは思いますが、移行ツールが提供されたら、ぜひ先陣を切ってみてください。きっと他機関の励みになるはずです。

下城 陽介（人材育成作業部会・上越教育大学）

駆け込み！ DSpace等からJAIRO Cloud（現WEKO）への移行相談会

- 日程：2019年5月30日 13:30-15:30
- 会場：一橋大学一橋講堂（東京都）
- Web：[https://jpcoar.repo.nii.ac.jp/?page_id=49# href_353](https://jpcoar.repo.nii.ac.jp/?page_id=49#href_353)
- 参考：JAIRO Cloud (WEKO2) 移行Q&A <http://id.nii.ac.jp/1458/00000147/>

Japan Open Science Summit 2019

2019年5月27日から28日にかけて、Japan Open Science Summit 2019（以下、JOSS）が学術総合センターで開催されました。昨年に続き2回目の開催となるこのJOSSは、オープンサイエンスをテーマとした国内最大のカンファレンスとされています。本稿では、JPCOARの活動報告を行ったセッションを中心に概要を報告します。

「C3 研究データマネジメント人材の育成を展望する」のセッションは、国内で現在進められている、研究データ管理（RDM）に関連する複数の人材育成プロジェクトについて、各々の取り組み内容を一望するとともに、プロジェクト間の関係性や連携の可能性について議論する場となりました。JPCOAR研究データ作業部会からは、NIIと協働して取り組んできた、研究支援者向けのRDM教材開発・普及活動についての報告と、今後の展望についての説明を行いました。國本千裕氏（千葉大学）からは、アカデミックリンクセンターにおける学生向けデータリテラシー教材開発の取り組みについての報告が行われました。教材は、学習効果を高めるべく、研究リテラシーにデータリテラシーを埋め込み、学習者が自らの文脈に引き付けて学べるよう工夫されていることが紹介されたほか、教材開発を通して、研究者を支援する専門職の養成を目指した開発体制についても説明が行われました。青木学聡氏（京都大学）からは、研究データに関する学内アンケート調査を行ったところ、研究データについての共通認識不足がわかったことが紹介され、共通理解を促進するには、教材だけでなく、RDMについての成熟度を自己評価するルーブリックの活用が有用であるとの提言がなされました。飯室聡氏（国際医療福祉大学）からは、日本医療研究開発機構（AMED）による「研究データの質向上の指導者育成プログラム開発事業」に採択され、開発中の指導プログラムについて、概要の紹介と今年度中に完成予定とのアナウンスが行われました。尾鷲瑞穂氏（国立環境研究所／研究データ利活用協議会小委員会「ジャパン・データリポジトリ・ネットワーク」（JDARN））からは、内閣府の国際的動向を踏まえたオープンサイエンスの推進に関する検討会が2019年3月に公表した「研究データリポジトリ整備・運用ガイドライン」について、信頼できる研究データリポジトリの整備・運用に関する要件のうち、人的基盤に関する要件を中心に、概要の紹介が行われました。今後の課題としては、利活用支援まで考慮したガイドラインの解説書作成を挙げられました。各報告者らによるディスカッションでは、教材は活用しつつ、教材で掲

げられている理想と実態との差を埋めていくためにはルーブリックの活用が有用である、機関を越えた事例の共有が必要である、RDMに関わる様々なインフラを利用することで得られるメリットを研究者に伝え普及を図り、RDM推進に繋げていくことが望ましい、等の意見が出されました。

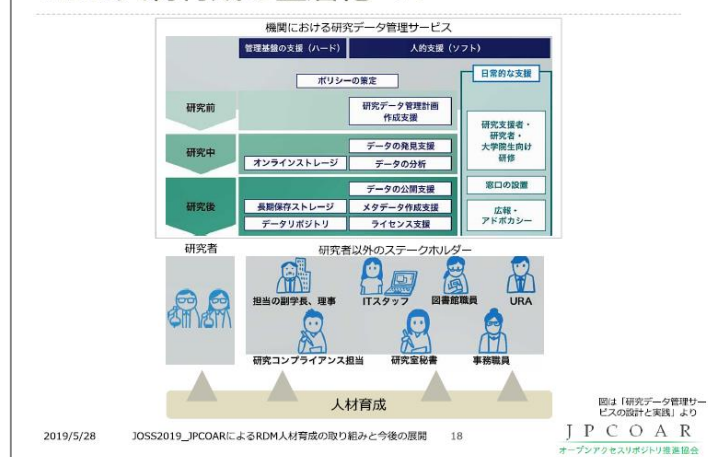
このほかにも、「C4 機関リポジトリにおける研究データ公開に向けた取り組み」のセッション（九州大学におけるデータポリシー策定に向けた試みについての報告等）、「G1 研究活動の新たな常識としてのデータ引用の実現に向けて」のセッション（データ公開ポリシーを有する学術雑誌が増加していることについての報告等）等々、ご紹介したい内容はまだまだありますが、JOSSの資料の大部分はWeb上で公開されていますので、ぜひ以下のサイトからご参照ください。

西菌 由依（研究データ作業部会・鹿児島大学）

Japan Open Science Summit 2019

- 日程：2019年5月27日 - 28日
- 会場：学術総合センター（東京都）
- Web：<https://joss.rcos.nii.ac.jp/>

RDM人材育成の重層化へ？





Open Repositories 2019 (OR2019) の参加レポートをお送りしたい。筆者としては、[2016年のアイルランド（ダブリン）](#)、[2017年のオーストラリア（ブリズベン）](#)に続き、3回目のOR参加となる。

ドイツ第2の都市と言われるハンブルクは、下積み時代のビートルズが過ごした街としても有名である。南をエルベ川、北をアルスター湖に挟まれた市街地には、中小の運河が無数に張り巡らされ、川沿いにそびえる倉庫街には夜景を撮影する人が群がる。会場となったハンブルク大学は1919年の創立で、折しもちょうど100周年を迎えたところだった。今回の会議のロゴは、港湾地区に数年前に誕生したエルプフィルハーモニー・ハンブルク（コンサートホール）の外観がモチーフになっている。また、スポンサーのAtmire社からは参加者全員プレゼント（？）として[「dc.contributor」](#) Tシャツが提供された。

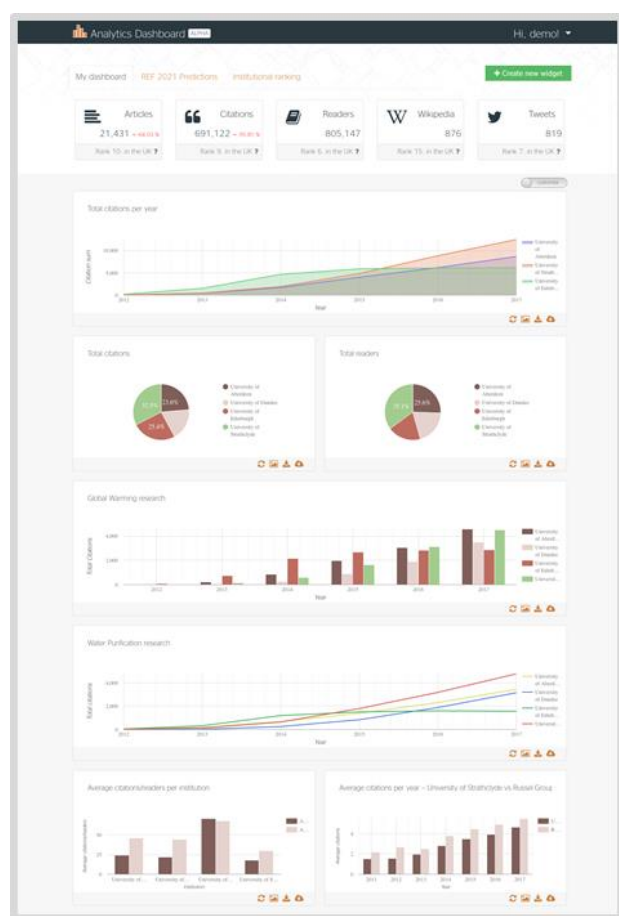
例年通り会議前日（10日）には20本のワークショップが開催され、筆者は「A user journey in OpenAIRE services (I)」（午前）と「Repository/CRIS Workshop II」（午後）の2つに参加した。続く3日間の本会議では、日本語訳も出版されている『LEAN UX』の著者ジェフ・ゴーセルフ氏による基調講演に続き、5会場に分かれての40本のパラレルセッションが展開されていく。本会議初日夜には51本ものポスターセッション（今回は1人1分間のポスター紹介プレゼンMinute Madness付き）があり、ドリンク片手に熱い意見交換が行われた。なお、プレゼンとポスターセッションでは物質・材料研究機構（NIMS）からデータ管理基盤に関する発表があった。

会議で見聞きしたことのうち、筆者にとってとりわけ面白かった点をいくつか紹介したい。



①CORE (CONnecting REpositories) (英国)

COREは、英国のOpen UniversityおよびJiscによって開発されている、世界最大のOA論文アグリゲーターである。COREのデータをベースに、[CORE Discovery](#)という、Unpaywallと類似のブラウザ拡張機能が提供されている。また、現在は[CORE Analytics Dashboard](#)という研究機関向けの研究評価ツールが開発中のようだ。SciVal (Elsevier 社) やInCites (Clarivate Analytics社) のような商用有料ツールに対抗するもので、3ステップで自分好みのグラフを作成することができる ([デモ動画](#))。このようなツールで肝となる引用データとして、Microsoft Academic Graphが使われている。



②Orpheus (オルフェウス) (英国)

Orpheusは、ケンブリッジ大学が開発し、実際に同大学の機関リポジトリの運用で活用されているオープンソースソフトウェアである。REF (Research Excellence Framework) によるOA義務化への対応を効率化するために、ジャーナルポリシー (セルフアーカイビング、APC、ライセンスなど広範な情報を含む) を機械的に収集し、データベース化できる。ケンブリッジ大学の成果物の80%をカバーし、週あたり14.5人時のコストダウンにつながったという。口頭発表の他に[ポスター](#)も出展されており、今回のベストポスター賞に輝いていた。ウェブサービスとして展開してくれたらありがたいのだが……。

③DeepGreen (ドイツ)

グリーンOAネタをひとつ。KOBV (Kooperative Bibliotheksverbund Berlin-Brandenburg) などドイツの6機関がDFG (Deutsche Forschungsgemeinschaft) の助成を受けて推進中のプロジェクトである (2016.1~)。一言で言えば「出版社に学術雑誌論文のメタデータ+本文を提供してもらい自動的に著者所属機関のリポジトリに登録」するものだ。英国ではJisc Publications Routerという同種の取組が行われており、DeepGreenではそのオープンソース版を使っている。ただ、ドイツ特有の背景として、「[アライアンス・ライセンス参加機関の著者が上記出版社に投稿した論文については、エンバーゴ無しで機関リポジトリでのオープンアクセス \(以下OA\) を認めさせた](#)」ものの、論文がこれに該当するかどうかのチェックに時間がかかるためあまり活用されていないという事情があるようだ。プレゼンでは実際にどれくらいうまくいっているかという紹介はなかった。出版社の協力が得られるかどうかは難問だが、仮にPlan Sのような強力なポリシーと組み合わせさったら……? と想像をたくましくした。7月末より、Karger、SAGE、Frontiers、De Gruyter、MDPIという5出版社と、27機関が参加する[advanced test phase](#)が開始されている。



最終日、会議を締めくくると[基調講演](#)には、Heather Piwowarがホッケーウェアを身にまとって登場した。彼女らの開発したUnpaywallはブラウザ機能拡張のひとつで、インストールした状態で電子ジャーナル等の論文 (ランディングページ) を表示すると、論文のOA版がどこかで入手可能かどうかを知らせてくれる便利なツールである。Unpaywallの背後には世界中のリポジトリで公開されたOA文献が存在しており、「ここにいるすべてのひとの力がこのサービスにつながっている」と聴衆を鼓舞する一面もあった。

次回、節目の第15回を迎える[Open Repositories 2020](#)は、初のアフリカ大陸 (南アフリカ共和国、Stellenbosch大学) で開催されることが発表され、「これまでの会議とは内容的にも参加者層的にも"different"なものになるだろう」と述べられた。

林 豊 (コンテンツ流通促進作業部会・国立情報学研究所)

Open Repositories 2019

- 日程：2019年6月10日 - 13日 (10日は前日ワークショップ)
- 会場：ハンブルク大学 (ドイツ)
- Web：<https://or2019.blogs.uni-hamburg.de/>
- 資料：<https://or2019.blogs.uni-hamburg.de/program/>
- 動画：<https://lecture2go.uni-hamburg.de/l2go/-/get/l/5134>

報告

COAR Annual Meeting 2019

2019年5月21日から23日にかけて、フランスのリヨン大学で開催された国際会議COAR Annual Meeting 2019に参加しました。オープンアクセスリポジトリ連合（COAR）が主催しており、10周年を迎えた今回の会議は40か国ほどから約110名の参加がありました。

メタデータに関するワークショップでは、OpenAIRE・JPCOAR・DataCite・COARからメタデータのローカルな要求と国際的な互換性をテーマに報告がありました。私はJPCOARスキーマに関する報告を行い、適切な国際標準が見当たらない項目への対処に対する共感や、複数の国際標準を採用していながら日本独自の事情を反映している点に対する関心などを持たれた様子でした。その後のディスカッションでは、メタデータの国際的な相互運用性を高めるために必要なことについて議論が行われ、COARに対してはOAI-DCの後継となるようなメタデータの新たな国際標準を開発することよりも、それぞれのメタデータフォーマット間のマッピングを検討するためのサポートを求めていることがわかりました。JPCOARスキーマはCOARの統制語彙を採用し、OpenAIREと情報共有を行いながら策定されており、参加者からの注目度も高く、他国のよい参考事例になれそうだと感じています。

そのほか、研究データや次世代リポジトリなどのテーマごとにセッションが行われましたが、次世代リポジトリが実装フェーズにあるため全体的に具体的なシステムやサービスの話題が多く感じました。また、話題の具体性が高まることによって、メタデータとテクノロジーやテクノロジーとユーザなどのギャップを埋めるということについても頻繁に議論が行われ、各セッション間が相互に作用するものとなっていました。

今回はワークショップで発表させていただいたためか、他国の参加者からJPCOARスキーマだけでなくJPCOARのあり方についても多くの質問やコメントをいただきましたし、とても刺激を受けました。各報告の資料はCOARのウェブサイトにて公開されておりますので、ぜひそちらもご覧ください。

松村 友花（コンテンツ流通促進作業部会・神戸大学）

COAR Annual Meeting 2019

- 日程：2019年5月21日 - 23日
- 会場：リヨン大学（フランス）
- Web： <https://coar2019.sciencesconf.org/>
- 資料： <https://coar2019.sciencesconf.org/resource/page/id/1>
- 報告書： <http://id.nii.ac.jp/1458/00000177/>

報告

Asia OA Meeting 2019

2019年3月6日～7日にかけて開催された、COAR Asia OA Meeting 2019へ出席しました。今回の開催地はバングラデシュの首都ダッカ。筆者は前回ネパールでの開催に続いての出席となります。今回は、前回に比べてより、開催地のオープン化推進という側面が強くなっているように感じられました。本稿では、会議の中でも特に印象深かったトピックを中心にご報告します。



● バングラデシュのオープンサイエンス

バングラデシュは近年の情報化政策により、情報通信環境の急速な浸透を見せている国でもあります。会議のコーディネーターからは、それらの活用と政府主導のデータポータル“Bangladesh Open Data”により、バングラデシュはオープン化の一步を踏み出しつつあると紹介がありました。

一方で、バングラデシュの基幹研究である農業系の研究データについては、未だにデータの整理・蓄積・公開が十分になされていないため、国家規模でオープン化方針を策定し、利活用促進を図る必要があると述べられました。またOpen Educationのセッションでは、情報環境は整備されつつあるものの、経済的事情により学生の学習環境が十全でない、といった指摘がなされ、適切なライセンスでの教材公開とその活用を推進すべきと訴えられました。同様の主張は別のセッションでもなされており、教育・研究の発展を支えるものとして、オープン化へ寄せられた期待の大きさが推し量られます。

● インドの事情

Country Updateセッションでは、バングラデシュ、インド、日本から発表がありましたが、印象深いのはインドのOAジャーナルに関する話題です。DOAJに毎年数百件程度の登録申請があるほどのOAジャーナル大国ですが、問題はその質。出版主体の知見や事例・実績が不足しがちで、DOAJへの申請も大半がリジェクトされており、インドが粗悪学術誌の巣窟という印象を与えてしまっていると指摘されました。

昨今の国内でも度々、粗悪学術誌の話題が持ち上がりますが、プレゼンターの「OAジャーナルが金策や業績作りのための土壌と化している状況を止めなければならない」との主張は、まさにこれらとも重なるところです。

● 日本のリポジトリへ

リポジトリ担当者として聞き逃せなかったのが、出席者からの「日本のリポジトリで文献情報を見つけたけど、本文がなかった。どう入手すればいいのかわからない」という質問です。

発信を行う以上は受信側へも十分に配慮しなければならない、とは考えてみれば当然なのですが、リポジトリ業務ではどうしても収集・発信という側面に集中してしまいがち。メタデータのみでの公開であっても、もう一步、利用する側に踏み込むこと、例えば本文の入手方法の案内や、直接手配できるオーダーフォームを用意するなど、限りなく障壁なきアクセスに近い形で提供する体制が必要なのではないか、そんなことを考えさせられました。

今回、特に現地の参加者からは、オープン化推進は当然ながら、そのコンテンツの活用を望む立場の声が多く聞かれました。今まさに、情報化を通じて発展を遂げつつある地域が、オープン化にどれだけの期待を寄せているか、その大きさを切に感じることもなりました。

では、それを支える機関の役割はどうあるべきでしょうか。会議では、プラットフォームの整備、方針策定、教育・啓発、キュレーションサービス、学術界と一般社会との接続などが挙げられました。また、前述の利用者の立場での体制構築も重みを増してくると思います。世界に活用される情報の流通基盤になるために今後、日本のリポジトリをどうしていくべきか、今回の内容を踏まえて更に思慮を深めていく必要があると感じました。

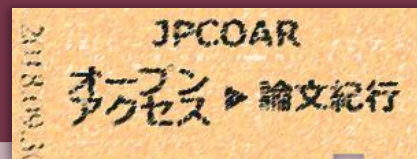
中谷 昇（コミュニティ強化・支援作業部会・鳥取大学）



Asia OA Meeting 2019

- 日程：2019年3月6日 - 7日
- 会場：バングラデシュ農業研究所（バングラデシュ）
- Web：<https://www.coar-repositories.org/community/asia-oa/asia-oa-meeting-2019/>
- 報告書：https://jpcoar.repo.nii.ac.jp/?page_id=49#_href_378

連載：オープンアクセス論文紀行



機関リポジトリで公開されている論文から毎回テーマを決めて、専門家以外の方にとっても親しみやすい日本語文献を紹介しています。4回目となる今回のテーマは「サイバー・カルチャーとその周辺」です。

タレコミ募集！

次回のテーマは「観光」

本連載は JPCOAR 参加機関のみなさんの推薦で記事を作っていきます。次回テーマは「観光」。定番の観光スポットやご当地自慢、話題のコンテンツ・ツーリズム、ダーク・ツーリズム、聖地巡礼などなど、関連する論文の情報を募集中です。自機関のリポジトリコンテンツの自薦もちろん大歓迎。奮ってご応募ください！

■投稿フォーム（2019年10月31日まで）<https://forms.gle/XWmxEHF4Nxt2knWHA>





オープンアクセス 論文紀行

J P C O A R
オープンアクセスリポジトリ推進協会

Vol.4 サイバー・カルチャーとその周辺

国内の多くの大学が、所属研究者の執筆文献を大学のウェブサイト（「機関リポジトリ」）で公開しています。その中には、専門家の方以外にも親しみやすい日本語文献もいっぱい！ CiNii Articlesであなたも楽しそうな文献を見つけてみませんか？

『n次創作観光』とは？（北海道大学）

eスポーツの魅力に関する考察
（事業創造大学院大学）

社会科学の研究フィールドとしての仮想世界：オンラインゲームのユーザー・コミュニティ（高崎経済大学）

IT 時代の人間関係とメンタルヘルス（その2）ー急速なスマホの普及の功罪：さまざまな便利さの享受に伴う、友人や家族との豊かな会話や孤独な時間を享受する機会の減少ー（長野大学）

小中学生のインターネット使用に関する実態調査：親の把握状況と親子間の認識の違い（金沢大学）

SNSにおける非匿名関係でのコミュニケーションの成立と話題の持続性について：Facebookにおける“しりとり”を例として（中部学院大学）

Twitterにおける頻出語句ランキング表示システムの開発による災害検知の検討（山口大学）

短期大学生を対象としたスマートフォン依存の調査報告（中村学園大学・中村学園大学短期大学部）

ネットの日本語ー2ちゃんねるとニコニコ動画を中心にー（鹿児島大学）

オンラインショッピングに対する大学生の意識：都市部と地方における調査を基に（愛媛大学）

スマホ利用による若者のコミュニケーションの変容（上）
（下）：SNSは若者の感性を変えたのか（茨城大学）

これからの時代に音楽を「売る」こと（千葉大学）

ナイト・エンタテインメント概説〈飲酒〉ー居酒屋からオンライン飲み会への変遷と酒種ロングテール化ー（江戸川大学）

アイテム課金型ゲームにおける経済モデルについて（跡見学園女子大学）

ファッションの購買行動におけるInstagramの影響について（専修大学）

「石貨・仮想通貨・ブロックチェーン」（早稲田大学）

オフ会の蜜と罠（法政大学）

ソーシャルゲームの時間管理戦略についての研究（関東学院大学）

Twitterのアイコン選択における自己呈示と印象形成：ツイート内容の分析による検討（奈良女子大学）

自己愛傾向はスマートフォンへの没入をもたらすか：地下鉄内での行動観察に基づく検討（大阪大学）



ご紹介している文献は、CiNii Articles（<https://ci.nii.ac.jp/>）から検索し、各大学のウェブサイト（機関リポジトリ）で全文を閲覧可能です。

CiNii
Articles

論文検索	記事検索	全文検索
フリーワード		検索
すべて	本文あり	詳細検索

本号から「参考にしたい！！グッドプラクティス」の新連載を開始します！！最初の事例は沖縄科学技術大学院大学。沖縄科学技術大学院大学では学術論文のOA率90%超という大きな成果を上げていますが、どのように実現しているのでしょうか。OAを実現するためのライセンスの仕組みとワークフローを紹介していただきました。

研究者と協働するOpen Accessの取り組み

本稿は沖縄科学技術大学院大学（OIST）でのオープンアクセス（OA）の取り組みについて2019年5月28日にJapan Open Science Summit 2019で発表した内容を中心に（一部最新情報に更新）ご紹介いたします。

本学では「『オープンアクセス』とは成果物を対価なしに研究・学問のために制限なく利用できるよう、一般に公開することである」と定義しています。その公開先としては、1）本学の機関リポジトリ（OISTIR）、2）サブジェクトリポジトリ、3）出版社サイト等が挙げられます。本学の機関リポジトリ（OISTIR）に登録義務があるものは学術論文・博士論文、登録範囲は2017年1月1日又はそれ以降に出版、登録する版は出版社版又は著者最終稿、登録者は本学で雇用されている者（但し、図書館員が登録者に代わり登録を行う）と規定しています。本学の図書館は館長を除き職員3名、派遣職員1名の計4名でリポジトリ業務に携わっています。

本学は著者がOA実現のための義務を果たし、図書館員がそのために必要な支援を行うことをOAの基本姿勢としています。以下にその実践方法について説明いたします。

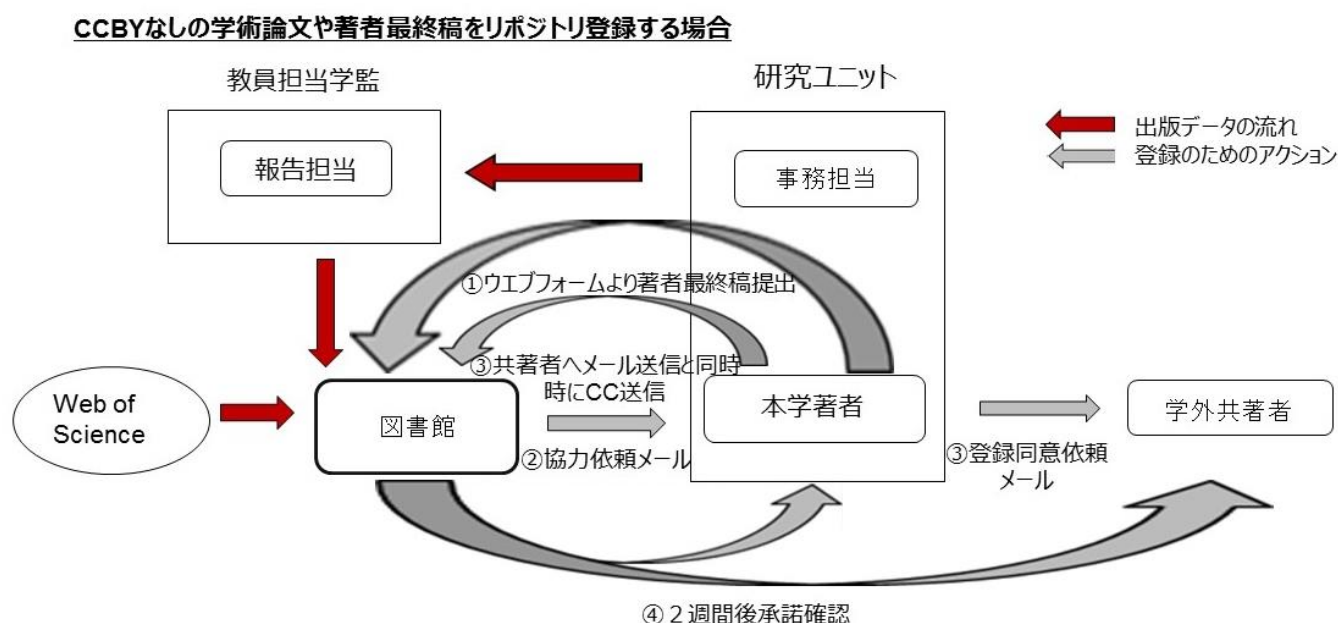
1. OISTIR登録ライセンス

このライセンスは本学図書館と学内著者の間で締結される契約書です。全ての著者は在職中に1度だけ包括ライセンスであるOISTIR登録ライセンスに押印又は署名し、図書館へ2部提出することになっています。このライセンスに含まれる内容で図書館にとって重要なのは以下の2点です。

- 1）2017年1月1日又はそれ以降に出版される全ての成果物をOISTIRに登録することに同意する。
- 2）対象成果物に共著者がいる場合、登録者は運用指針に従ってあらかじめ学外共著者に書面による承認を得る責任があることを認識し、これに同意する。

この登録ライセンスを提出することにより、学内著者は論文が出版される度に登録申請をする必要がなくなり、図書館員は学内著者からすでに承諾を得たものとして登録業務を進めることができます。登録ライセンスにより責任分担を明確化したことが学内著者の中でもとりわけ外国人に対して著者の責任を周知するために大きな役割を果たしています。

図1 OISTIR登録のためのワークフロー



2. OISTIR登録のためのワークフロー（図1）

本学研究ユニットは四半期ごとに成果物の報告をする事になってます。図書館ではそのデータを再利用し、さらにWeb of Scienceからのデータも本学のデータを補完するものとして利用し、登録を行っています。学外共著者へ登録の承諾が必要な場合には、学内著者にメールのひな型を送り、それを編集して学外著者に送信します。メール内容には登録を承諾しない場合には2週間以内に返信する必要があると書かれており、2週間経過すると図書館から学内著者と学外共著者へ登録に同意して頂いたことを確認するメールを送信しています。

3. OA率

OA率とは「OA対象論文がOA化され、その情報がOISTIRにも登録された」割合です。当館ではOAへの取り組みを強化するにはOA率を教員評価の指標に含めることが必要であると考え館長に働きかけたところ、2018年より教員評価の指標の一つに加えられることが教授会で決定しました。その指標項目は、1）登録ライセンスの提出確認、2）OA率の提示です。それはOISTIRで公開された論文数÷OA対象論文数で算出されます。今回の指標対象期間は2017年1年分と2018年1月-6月の1年半となりました。表1は本学の全成果物のOA率の割合を年度別に示しています。

表1 全OIST成果物のオープンアクセス状況

種類		2017年 (1月-12月)	2018年 (1月-6月)
出版論文数	A	254	140
オープンアクセス対象ではない論文数	B	22	27
オープンアクセス対象論文数	C (A-B)	232	115
OISTIRで公開された論文数	D	212	107
著者のアクションがないためにまだオープンアクセスではない論文数	E	20	10
オープンアクセス率	F (D÷C)	91%	93%

本学のOA率は出版論文数に対してどれだけOA化されたのかではなく、本学がOA対象とする論文に対してどれだけOA化されたのかを確認しています。そのためOA対象論文を算出するには出版論文数からOA対象ではない論文数を差し引きます。OA対象論文ではない理由として、出版社ポリシーにより出版社版・著者最終稿のいずれも登録できない場合や、共著者が離職し連絡先が不明の場合等があります。何等かの事情でOA化できない論文については本学著者が「削除又は非公開申請書」を当館に提出し、それを図書館長が承認するとOA対象論文から外すことができます。それにより、OA率は単純に本学著者がどれだけOA化への義務を果たしているのかを示す割合となります。

OA率は本来100%であるべきなのですが、100%に満たないユニットには表2のような登録状況レポートを教員に提供しています。

このレポートではOA率が100%ではない理由と学内著者がどのような行動を起こせば100%にできるかを説明しています。OA率は最初に算出した時と教員評価の対象になった後に比べると各年とも数パーセント上昇しました。教員評価に係る他の重要な指標と比べるとOA率は参考程度の指標ではありますが、教員のオープンアクセスに対する意識向上を図る上で大変役立ちました。オープンアクセスを強力に推進するためには本学著者が著者としての義務を理解し、図書館員と協働しながらオープンアクセスの責任を果たし、さらにそれを評価するしくみが効果的であると考えています。

上原 藤子（コンテンツ流通促進作業部会・沖縄科学技術大学院大学）

沖縄科学技術大学院大学機関リポジトリ（OISTIR）

- URL : <https://oist.repo.nii.ac.jp/>

表2 登録状況レポート

ユニット	論文タイトル	本学著者	現状	著者からアクションが必要なこと	公開状況	必要な版	登録ライセンス提出	URL	Email送信日
Bユニット	論文A	著者A	著者のアクション待ち	学外著者へのメール送信、著者最終稿の提出	未公開	著者最終稿	○	*****	06/25/18
		著者B					×		
		著者C					○		

Open for Whom? Equity in Open Knowledge

OCTOBER 21-27

今年のオープンアクセスウィークは10月21-27日です。今回のテーマは“Open for whom? Equity in open knowledge”です。知識をオープンにすることが標準になってくると、「誰のためにオープンにしているのか」という問いが重要になります。我々機関リポジトリ管理者は、どのような知識をオープンにすると情報の公平性を加速できるのか、という意識を持ちながら日々運用する必要があるのでしょうか。

さて、JPCOARでは今年もオープンアクセスウィーク2019の特設サイトを開設します！！特設サイトでは国内の様々な取組みを紹介する予定です。多くの機関がオープンアクセスウィークに合わせてアクションすることと期待します。

Open Access Week 2019

- 日程：2019年10月21日 - 27日
- 会場：Everywhere
- Web：<http://www.openaccessweek.org/>
- JPCOARオープンアクセスウィーク2019特設サイト：
https://jpcoar.repo.nii.ac.jp/?page_id=128

第21回図書館総合展フォーラム

始めなければ始まらない

ー JPCOAR オープンアクセスリポジトリ戦略の幕開けー
(仮)

鋭意企画 中！

【主催】オープンアクセスリポジトリ推進協会 (JPCOAR) 【共催】図書館総合展運営委員会



11月12-14日に開催される第21回図書館総合展において、フォーラムを開催することが決定しました！

JPCOARは、今年3月に「オープンアクセスリポジトリ戦略2019-2021年度」を策定し、今号p.1のとおり新たな体制による活動を開始しました。今回のフォーラムでは、戦略策定前後から今後の事柄を中心に、参加機関・作業部会より様々な活動・事例についてご報告します。

ご参加いただいた皆様へより多くのものを持ち帰っていただくため、現在、鋭意企画調整中！詳細が決定次第、JPCOAR Webサイト、Facebook等でお知らせしますので、どうぞお見逃しなく！

始めなければ始まらないーJPCOARオープンアクセスリポジトリ戦略の幕開けー (仮)

- 日程：2019年11月14日 10:00 - 11:30
- 会場：パシフィコ横浜 アネックスホール (図書館総合展第5会場)
- Web：<https://www.libraryfair.jp/forum/2019/6732>

編集後記

音楽に動画とサブスクリプションにはまっています。学術雑誌もリーズナブルに利用できないものかと思ひます。(岡大・大園)

最近潮流を追っているのか波に飲み込まれているかわからなくなってきました・・・うまく波乗りしたい！(一橋大・村井)

最近になって本学IRがOpen ArchivesやOAIsterへ登録されていないことに気付き、慌てて申請しました。基本は大事。(鳥大・中谷)

Webサイト：<https://jpcoar.repo.nii.ac.jp/>

Facebook：<https://www.facebook.com/jpcoar/>



JPCOAR Newsletter: CoCOAR 第8号

2019年9月3日 発行

オープンアクセスリポジトリ推進協会